

1年生社会科通信 第6号

2022/01/25

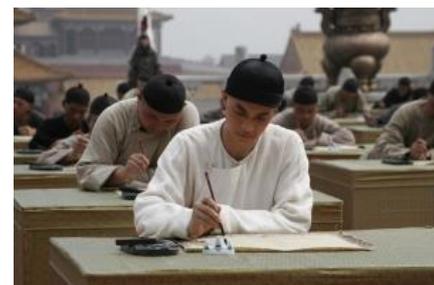
文責：山本 賢介

○その歴史を今に生かす

「あらゆる歴史は現代の歴史である」と有名な歴史学者が言いました。どの時代を勉強していても、現代につながるような教訓や改善点が見つかるということです。皆さんは、日本の歴史についても古代から中世の歴史までを勉強してきました。二つの時代は文化も習慣も政治も違う世の中でしたが、今の世の中はどちらの時代に近いものであって欲しいと思いますか？

○実力はどう評価されるか ～古代の試験から考える実力主義～

皆さんは「実力で勝負してこい！」という言葉をかけられたことがあるでしょうか？ このときの実力というのは、何を指して言っているのでしょうか？ 最近の日本でも「試験は実力主義」「スポーツは実力主義」と言われていますが、本当にその人の実力が正確に測れているのでしょうか？ 歴史から見てみましょう。



飛鳥時代には、推古天皇や厩戸皇子(聖徳太子)が、冠位十二階や十七条の憲法などを定めて、役人の採用を実力主義に改めました。そうして、中国の当時最先端の学問を学んだ遣唐使や留学僧などが重要な役職に就くことになります。このときの学問というのは、中国で行われている儒学のことでした。孔子の弟子たちが書き留めた『論語』などの本を、きちんと理解できているかというのが大きなポイントになりました。

推古天皇の頃には、まだ有力な豪族などに配慮していることが多かったのですが、天武天皇・持統天皇の時代を経て、奈良時代には役人の採用は試験による能力重視の形に変わっていきました。しかし、能力ある人物を育てるということで保護されていた寺院が政治勢力として現れることで、今度は天皇中心の政治が揺らいでしまうという出来事に直面します。

こうして本来は能力のある人を育てて、天皇中心の制度を守ってもらうためのものだった仕組みが、今度は天皇の指揮・命令がなくても勝手に動き始めるという仕組みに移り変わっていきます。もちろんこれも能力の一部でしょうが、本来求められている「天皇を支えるため」の目的からは外れています。そのため、こうした仏教勢力が言うことは、能力と関係なく段々と評価されなくなっていきました。

こういった事例から学ぶ「実力主義」とは何でしょうか？ ここには2つの「実力」があります。1つは、その時代のシステムに適応し試験などに合格する「実力A」。もう1つは、本当の意味で自分の考えたシステムを実行する「実力B」。本来はともに同じ人間にある「実力」ですが、評価のされ方は全く異なります。

つまり、私たちの「実力」は、現在のシステムを運営する側が評価することになっており、これを乗り越えなければ、「実力はない」と思われ、自分が変えたいと思っていることも変えられません。また反面、社会を適応する力だけだと、実際に社会を動かす側にまわったときに、実行できず「実力がない」と思われてしまいます。

最初の話に戻れば、「実力で勝負してこい」はかなり状況による言い方だということです。適応する実力を試されているのか、システムを変えるようなことを期待されているのかで意味が大きく変わってきます。そして、皆さんがこの先生生きていくときに、どちらの「実力」が求められているのかを考えることも、自分自身の生き方を考える上で大切になってきます。古代の役人から今回は「実力主義」を考えてみました。他の時代の人々はどんな「実力」を求められていたのかを、今後の学習を通して、時々考えてみて下さい。



能力主義



成果主義

〇”自由”はなぜ、宗教を求めるのか ～中世の人々の祈りと生活～

皆さんは中世という時代をどのようにまとめましたか？ 調べ学習でも、あまり一般の人々に注目する人はいませんでしたが、中世の人々は大いに“自由”を楽しんでいました。鎌倉時代になり、全国を武士が支配するようになると、各地で農業、手工業、商業が発展するようになります。そうして、自由に使えるたくわえ(お金)ができ、一般の人々も歌や踊り、服装、大道芸、食事など様々な文化を楽しむ余裕が出てくるようになります。

奈良・平安時代の人々の生活に比べると、移動や転職などもしやすくなり、より豊かな生活を目指して人々は活発に動いています。一方、同時に拡大して行ったのが、仏教や神道などの宗教勢力です。自由になった人々が、神社やお寺にお参りをするようになり、時には寄付をすることで一気に宗教活動が活発になります。

では、どうして自由になった人々は自分のためではなく、お金を寄付するようになったのでしょうか？ 私たちが生活する中で、どうしても理不尽なできごとというのがあります。当時の人々も、そうした理不尽な出来事に向き合っていました。丁寧に世話をしているのに作物が育たない年があること。かかりたくもない病になぜかかかってしまうこと。商売をしているときに、お金を払わないお客さんにであってしまふこと。戦の戦場に近いために、武士たちに金品を奪われてしまうこと。こうした理不尽に向き合うために、人々は神や仏に祈り、自分の身に災いが降りかかってこないように生活していました。こういう不幸に出会うかどうかは、当時の人々にとってみれば「運しだい」でした

三島大社にゆかりのある源頼朝も、いろいろな場所で戦の勝利を祈っています。頼朝も戦の準備は欠かさずに行っていましたが、作戦がうまくいくか、頼んでおいた味方が増えるのかなどについては「運」の要素が強かったわけです。それ故、自分の力の及ばない範囲については、神や仏に祈ることを通して、無事や勝利を引き寄せるよう考えていました。

「人事を尽くして、天命を待つ」という行為が、今も昔も続いているのが面白いですね。中世は、僧兵たちも強く武士も熱心にお参りに行っていました。「祈り」と「暴力」という、相反するような力が、人々を大きく動かすきっかけになっていたところが、この時代ならではの性格だと思います。

現在では、「不可思議な出来事」と思われていたことのほとんどが、科学の力で説明できるようになりました。天気の不思議も、お金が増える・減るもかつては神仏のみ知る世界でしたが、現在では仕組みを理解できればどうしてそういったことが起きるのが明確になる時代です。皆さんの人生も、祈りの力だけでなく、自分自身の選択として切り開いていって欲しいと思います。

上で言ったこととは一見反するようですが、皆さんには伝えておきたいことがあります。現代は、自分の人生の責任は、ほぼ 100%自分に降りかかってくる時代でもあります。まっすぐに前向きに生活できている人は、毎日の学習や運動や人との交流の中で成長を感じることができると思います。ですが、目の前のことで悩み、立ち止まってしまっていると感じる人もいます。そんな人たちは、「どうしようもない」出来事に直面したとき、全部を自分で引き受けるのではなく、中世の人々と同じように、目に見えない存在であっても神や仏に、自分の人生の理不尽の半分くらいを一緒に抱えてもらうという選択肢もありかもしれません。



三嶋大社



厳島神社



苦しい時の神頼み

